

8

中国四国ブロックのHIV医療体制整備

研究分担者 藤井 輝久

広島大学病院輸血部

診療教授 輸血部長・エイズ医療対策室長

研究要旨

本研究では近年HIV陽性者の非専門施設への受け入れを構築するための調査や資材の開発を中心に行っている。昨年度、介護福祉施設スタッフ向けの教育動画を作成したが、今年はそれを我々が主催する各職種向け研修会で上映すると共に、ホームページにも掲載した。その他、今まで各職種別に行ってきた研修会を見直し、職種横断的な研修会を立ち上げた。その目的は、拠点病院から非専門医療機関への病病・病診連携をさらに進めることであり、内容は主に地域連携室所属の看護師、ソーシャルワーカーの勉強会である。また現在の職種向け研修会においても、若手の教育に重点を置いた内容にブラッシュアップし、HIV/AIDSの医療・ケアに関わる人材を育てる必要がある。

A. 研究目的

本研究の目的は、HIV感染症患者に対する医療・福祉サービスが他疾患と同等に行われるよう、中国・四国地方の医療及び福祉体制の整備を行うことである。具体的には、①エイズ拠点病院・中核拠点病院（以下、拠点病院）のエイズ診療の質の向上とその維持、②非専門施設（病院、医院）や療養介護・福祉施設（以下施設）における疾患に対する偏見からもたらす差別的対応の解消、である。具体的な方策は、①拠点病院所属構成員に対する職種別研修会の開催、②教育資材の作成・配布を行いケア提供者の人材育成と資質の向上を図ること、③非専門施設や施設構成員に対し、より平易な内容による教育を行うことや、患者の受け入れの促進である。また薬害被害者から要望に応える形で、当該患者の高齢化および余病に対応する研究を通じて、具体的な方策を検討することも目的の一つである。

B. 研究方法

研修会に関しては、その参加者数と参加者アンケートなどを集計し、その内容や評価を集計した。その際に、個人情報と思われる項目を除いた。また倫理面の配慮としては、本研究に対し自施設の倫理委員会の承認を取得した。また学会や報告書等での

発表時には匿名化や集団名など、個人が特定できないよう配慮した形で行った。教育資材は、日常診療における患者、特に薬害被害者の要望あるいはブロック内の医療・療養介護福祉従事者のニーズ等を勘案し作成した。以前作成したものにおいても、新たな情報が得られた場合には、その内容を反映させるために、アップデートを行った。

C. 研究結果

1. ブロックでの教育研修

1-1. 医師を対象とした研修会

開催日：2025年7月28～29日（1回目）。2025年8月18～19日（2回目）。場所：広島大学病院（広島市）。研修参加医師数：計8人。

内容は【表1】の通りであった。参加者は全員卒業後10年以内の若手であった。研修内容は概ね好評で、特に「PWH/Aの体験談」は、全員が熱心に聴講すると共に多くの質問や感想が発言された。なお、各職種の講義資料は、「広島大学病院エイズ診療医のための研修会・資料集」としてまとめて、全国の拠点病院へ配布した。【図1】。

1-2. 歯科医師を対象とした研修会

1) 拠点病院勤務医師及び歯科医師会向け研修会

開催日：2025年11月9日。場所：岡山国際交流

表1 : 医師を対象とした研修会プログラム

午前	1日目(月)	午前	2日目(火)
		9:00	演習:HIV検査の勧め方・告知の仕方 公認心理師:喜花伸子、杉本悠貴恵 医師:山崎尚也
		11:30	外来見学 担当(医師):齊藤誠司、藤井輝久
		12:30	
午後		午後	
13:00	受付開始		
13:30	集合・オリエンテーション 担当(医師):山崎尚也	13:30	演習:症例検討 担当(医師):山崎尚也、藤井輝久
13:45	講義:HIV感染症(診療の現状と最近の話題) 医師:藤井輝久	15:00	講義:血友病の診療(薬害の歴史を踏まえて) 医師:藤井輝久
14:45	講義:薬剤師の役割 薬剤師:石井聡一郎	15:30	外来ケースカンファレンス
15:45	講義:看護師の役割 看護師:後藤志保、坂本涼子		
16:15	講義:ワーカーの役割 MSW:村上英子、浦島藍子	16:15	演習:ポストテスト 担当(医師):山崎尚也、藤井輝久
17:00	講義:PWH/Aの体談 担当:当事者	17:00	まとめ・終了
17:30	1日目のまとめ		

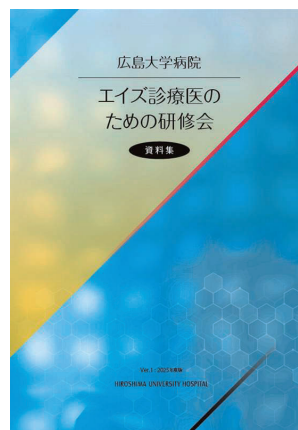


図1 エイズ診療医のための研修会プログラム資料集

表2 HIV陽性者歯科診療ネットワークが必要の無い時代を迎えるための必要なこと(自由記載)

- ・ 罹患者自身、医療者、一般の方々の知識up dateや学校での教育
- ・ 効果的な治療を続けていれば、HIVは感染しない(U=U)という事が広く理解される必要がある。
- ・ 大学の講義でここまで詳細にU=U等教わらなかったように思います(スタンダードプリコーションの範囲でした)。自分からふれにいかかった私も悪いのですが... もう少し身近に/自分ごとにしやすいと思います。
- ・ 国民全体にU=Uを浸透させることにより、HIV患者の診療があたりまえの世の中になるのでは。
- ・ HIV患者への偏見をなくすること。
- ・ 検査を気楽にうけられた治療につれる体制づくり
- ・ 歯科医師全員の意識改革
- ・ 本会議での講義が、一般知識として理解されること
- ・ 正しい知識、偏見をなくす
- ・ HIVを含め、性差別も他国と比べ強く存在すると思う。もう少し差別がなくなれば、ネットワークの参加率も上がると思う
- ・ その様な時代がもう来るとも思います。スタンダードプリコーション、スタッフへの教育は充分できているを思いますので...
- ・ 患者、医療者、患者家族などが正しい知識を身につけること
- ・ 感染力が低く、受診拒否の必要がないという認識の共有
- ・ 正しい知識と現状の把握をすべての人が理解すること
- ・ まずは我々医療従事者がHIVについての正しい知識をもつことが必要であると思う。そして、適切な感染対策、また、HIVについての偏見などステグマを無くすることでネットワークというものが存在しなくても、どこでもHIV陽性者を受け入れられるようになると思う
- ・ HIVに対する正しい理解を万人がもつこと
- ・ HIV感染対策はスタンダードプリコーションで十分であることの浸透が必要と思われる
- ・ U=Uが一般の方にも広がり、感染しないことの安全性が理解されること

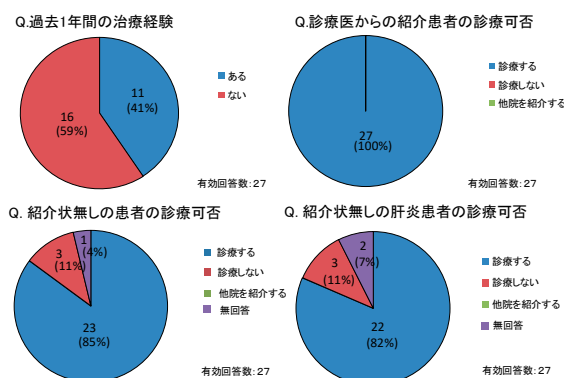


図2 拠点病院勤務医師及び歯科医師会向け研修会及び会議アンケート結果

センター(岡山市)。例年通り、午後から行われる「中国・四国地方HIV陽性者の歯科診療体制構築のための研究会」に併せる形で当日午前中に行った。研修参加者は歯科医師・歯科衛生士併せて計31人。内容は、講演①「HIV感染症の現状」(琉球大学大学院医学研究科 仲村秀太助教)、講演②「歯科への期待のメッセージ」(大阪HIV薬害訴訟原告団代表 橋本則久氏)であった。

午後からの会議では、昨年まで中国・四国地方の9県のうち、香川県のみ開業歯科医による歯科診療ネットワークが構築されていなかったが、今年度中に構築予定との報告があった。これにより、全県でHIV感染者の歯科診療体制(ネットワークと紹介システム)が構築されることになる。今後は、協力歯科医師が地域に偏在していないかを吟味し、偏在があればその対策を立てること、最終的には「どの歯科医院でも紹介状なしにHIV陽性者が通院できる」なることを目指すことが確認され、次年度以降も継続することとなった。研修及び会議後のアンケート調査の結果は【図2】【表2】の通りである。

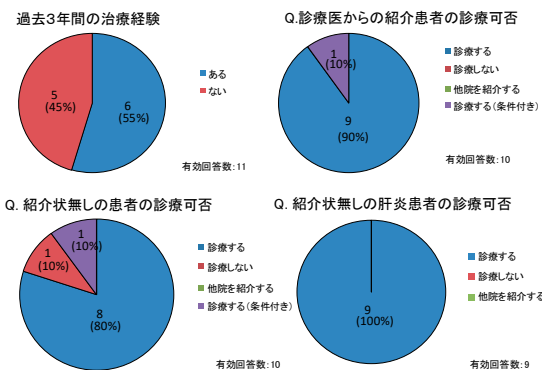


図3 広島県歯科医師会の会員・準会員のためのHIV感染症に関する講習会アンケート結果

2) 一般開業歯科医向け研修会

開催日: 2025年12月14日。場所: ジーベックホール・府中市文化センター(府中市)。研修参加者数10人。講演者は、国立病院機構福山医療センターの齊藤誠司医師、本院輸血部の山崎尚也医師、大阪HIV薬害訴訟原告団代表 橋本則久氏の3人であった。終了後の参加者に対するアンケート結果は、【図3】の通りであった。

1-3. 看護師を対象とした研修会

1) 初心者向け（2回）

開催日：初回2025年6月19日～6月20日、2回目7月24～25日。場所：広島大学病院（広島市）。参加人数は2回の合計で28人。

参加者の勤務施設は、県内が29%と最多で、その他9県全ての県からの参加者があった。症例経験は43%が「なし」と回答した。役職別では、一般スタッフが53%と最多であったが、主任、副師長・師長など中間管理職も43%を占めた。受講動機は、「基礎知識の習得（自己研鑽）」が参加者全員で一番多く、ついで「今後患者が来た際に対応できるようになる」「HIV看護の向上」であった。

研修後、参加者全員に内容についてアンケート調査を実施した。結果を【図4】に示す。

2) 事例検討（経験者向け）

開催日：2025年10月18日（オンライン形式）。参加者28人。当日午前に行われた「中国・四国ブロックエイズ治療ブロック/中核拠点病院等看護担当者会議」に併せる形で、会議終了後の午後に行った。

事例検討についての満足度は、全員が「満足」と答えた。また9県から一カ所に参集することが困難なことから次年度もオンライン形式で事例検討を行うことが確認された。

1-4. 中国四国ブロック内の拠点病院に勤務またはその院外薬局の薬剤師を対象とした研修会（薬剤師のための抗HIV薬服薬指導研修会）

開催日：2025年7月19～20日。場所：広島市文化交流会館（広島市）。広島県臨床心理士会が行う「第1回HIV/AIDS専門カウンセラー研修会」との共同開催。参加者は33人。講師・スタッフは計18人であり、うち14人が全国から集まったHIV専門薬剤師であった。全国から参加があった。

講義では、川崎医科大学病院 和田秀穂教授より、「HIV感染症治療～他職種に伝える薬剤師の役割を考える」と題した講義が行われた。HIV診療の最新動向を踏まえ、日常診療において薬剤師が押さえておくべきポイントを体系的に整理していただくとともに、医療現場における行動経済学の視点についてもご教示いただき、薬剤師の関わり方を多角的に捉える貴重な機会となった。

続いて、国立健康危機管理研究機構 国立国際医療センターエイズ治療・研究開発センター心理士 木村聡太氏より、心理職の立場からHIV感染症患者支援に関する講義が行われた。患者の心理的背景

や抱える不安、葛藤への理解を深めるとともに、薬剤師が多職種と連携しながら患者を包括的に支援することの重要性を改めて認識する機会となった。

その後の症例検討では、独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター薬剤部 神尾咲留未氏より症例提示がなされ、実臨床に即した課題をもとに、抗HIV薬治療の継続支援、副作用対応、アドヒアランス支援の在り方について活発な議論が行われた。参加者同士の意見交換を通して、施設間における取り組みの違いや共通する課題を共有することができ、実践に直結する学びの多い時間となった。

1日目後半および2日目には、「ロールプレイによる服薬指導の体験的学習」をテーマとした演習を実施した。広島修道大学健康科学部心理学科臨床心理士 内野悌司教授を中心に、オリエンテーションの後、患者対応を想定したロールプレイを行い、服薬指導場面におけるコミュニケーション技法や、患者の心理的背景を踏まえた関わり方について実践的に学習した。

2日目も引き続き演習を行い、参加者同士での振り返りを通じて、自身の対応の特徴や課題を客観的に見つめ直す機会となった。最後にレポート作成を行い、本研修会で得られた学びを整理し、日常業務へとつなげる形で閉会した。

1-5. メディカルソーシャルワーカー（MSW）を対象とした研修会

開催日：2025年8月23日。場所：岡山県Central Forest（参集形式）。研修会に先立ち、エイズ拠点病院に勤務するソーシャルワーカーの会議が行われ、中国四国ブロックエイズ拠点病院20施設、29人が参加した。

長期療養支援体制の構築に向けて、参加施設内で実施している取り組みは、①緊急時や将来の生活への意向確認（ACP）：定期的に医療者が意向を伺い、患者自身が考えるきっかけ作りを行う ②地域連携：地域で生活できるように、疾患に理解のあるかかりつけ医を獲得する。地域医療・介護施設に向けたHIV/AIDS出前研修を開催する。 ③身寄りがない人への支援フローチャートを院内で作成するなどが挙げられた。

研修は、会議参加者に加えて非エイズ拠点病院勤務のソーシャルワーカー5人が参加した。

医師・SW・大阪HIV薬害訴訟原告団の三者にて、講義①『行政が主導する「もんげ～性病クリニック検査」と医療者が主導する“岡山HIV診療ネットワーク”の連携からみえてくるHIV感染症の現状』、

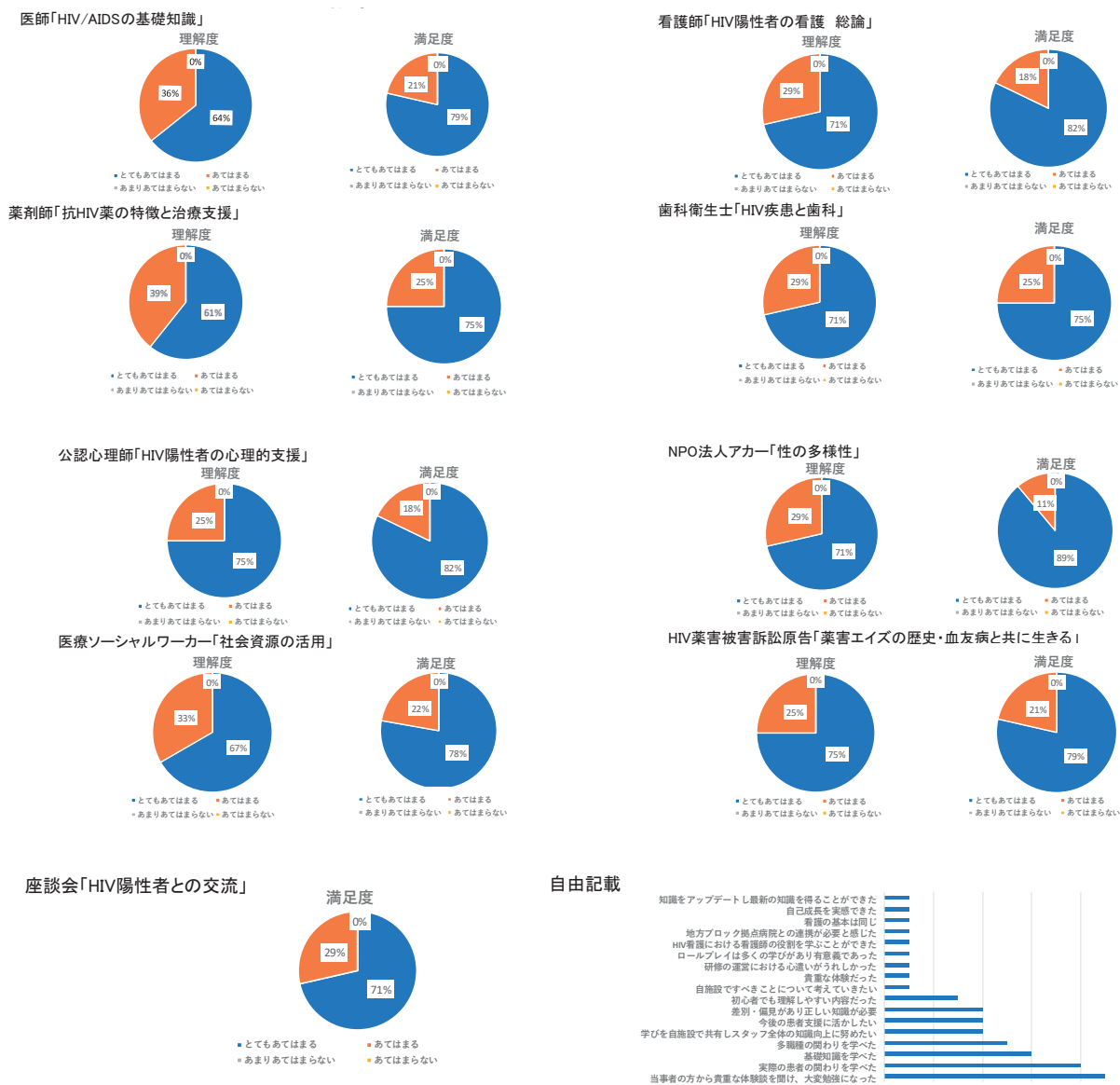


図4 看護師のためのエイズ診療従事者研修会アンケート結果（「とてもあてはまる」が最高）

講義②『エイズパニック時代のHIV陽性者支援』、講義③『血友病/HIV/HCVとともに生きる-薬害エイズの教訓から』と、本院SWによる支援事例の検討を実施した。

事後アンケートの感想では、「SWとしての価値観、自分自身の価値観について考えるきっかけとなった」、「だんだん歴史になってきている薬害エイズが今も終わっていないこと、そこに人がいることを改めて実感した」、「病院によって様々な支援方法があり、学ぶことができた」との回答が得られた。

1-6. 出前研修

2025年4月18日に広島市内の障害者グループホーム、7月16日は市内の回復期リハビリテーション病床保有病院において、実地での出前研修を行った。その成果か、脳腫瘍で寝たきりとなったHIV

陽性者の転院を承諾していただいた。またオンラインであるが、広島市内医師会の訪問看護ステーションに対しても行った。今後の予定では年度内に2回、訪問看護ステーションと市の介護福祉施設に対して、実施する予定である。出前研修の周知は、広島県エイズ治療中核拠点病院等連絡協議会及び医療従事者研修会のみならず、広島県健康福祉局医療介護基盤課、広島市健康福祉局高齢福祉部の協力を得て、案内のチラシの配布を依頼した。

1-7. その他

本項では、実施主体（主催）が本院ではないが、分担研究者やその研究協力者が研修の企画・運営に大きく関与し、かつスタッフとして協力した研修会について報告する。

1) 心理職対象HIV/AIDS専門カウンセリング研修会

1回目の開催日：2025年7月19～20日。場所：広島市文化交流会館（広島市）。前述の薬剤師向け研究会と共催。中国四国ブロック内のHIV治療施設に勤務する心理職及び福祉職を対象に集合形式で開催し28人の参加があった。HIV感染症の医学的知識と心理社会的支援に関する講義に加え、実際の支援場面を想定したロールプレイとグループディスカッションと事例検討を行った。事例検討は、心理職および福祉職が積極的に発言できるよう配慮し、新たな試みとしてPCAGIP法を導入した。事後アンケートにおいては、理解度について90%以上が「理解できた」と回答し、プログラムの満足度については100%が「満足」と回答した。

プログラムの所要時間については、昨年度は「長い」との回答が多く認められたことから、今年度はスケジュールの調整を行った。その結果、すべての参加者より「ちょうどよい」との回答が得られた。全体的に「基礎的な知識から最新の情報まで学ぶことができた」「他職種の視点や考え方を知る良い機会となった」などの満足度の高い意見が多くみられた。

2回目の開催日：2025年10月12日。場所：松江市民活動センター（松江市）。本研修会は、1回目と異なり心理職のみの単独開催である。中国四国ブロック内のHIV診療施設勤務の心理職及びHIV派遣カウンセラーを対象に事例検討会を行った。全体で11施設から12人の参加があり、特に山陰地域からの参加者が多くみられた。終了後は「患者理解を深めることができた」「参加者の意見や質問から多くの気づきを得ることができた」といった感想が寄せられた。

2) HIV抗体検査相談従事者のためのカウンセリング研修会

開催日：2025年6月13日。場所：エールエールA館（広島市）。中国四国ブロック内のHIV抗体検査相談に従事する医師、保健師および派遣カウンセラーに加え、昨年度に引き続き広島県内の電話相談事業を実施する団体を対象とし、30人の参加があった。HIV検査に関する講義と当事者の話、架空事例を用いたロールプレイで構成した。

研修参加前のアンケートでは、受験前の面談および告知時の対応について「自信がない」と回答した参加者が多かった。一方、研修参加後には、「少し自信がある」との回答が多く認められた。しかし、半年後に実施したアンケートでは、判定保留時の面談および陽性告知時の面談に関して、参加直後と比

較して自信度がやや低下する傾向がみられた。自由記述では、「ロールプレイがとても勉強になった」「学んだことを今後の相談業務に活かしていきたい」などの意見が寄せられた。

3) 全職種対象の研修会（包括的HIVカウンセリングセミナー）

開催日：2026年1月10～11日。場所：倉敷アイビースクエア別館フローラルコート（倉敷市）。中国四国ブロック内の中核拠点病院及び拠点病院のうちHIV診療を行っている医療機関を対象とした研修会を開催した。全体で14施設64人の参加があった。今回は、3施設の心理・社会的問題を抱えた症例を検討した。長期的な医療が可能となった現状を踏まえ、外国人支援や高齢化に伴う支援の在り方をテーマに、活発なディスカッションが行われた。

4) 地域連携に携わるソーシャルワーカーと看護師を対象にしたHIV/AIDS実践報告会・検討会

開催日：2025年9月26日。場所：霞会館（広島大学霞キャンパス内）。開催形式：実地&オンラインのハイブリッド形式。参加者は広島県内の地域連携に携わるSW・看護師・保健所職員、14人。他にオンラインとして広島県以外の中国四国ブロックエイズ治療拠点病院SWおよび看護師、13人であった。オンライン参加の設定目的は、次年度以降に他県での独自開催をめざすための参考として参加を促すためである。

参加者には事前学習として、エイズ予防財団作成のHIV感染症に関する動画を視聴依頼した上で、当日はHIV陽性者の受け入れ時に発生した課題とその対応方法の実践報告として、転院を依頼したエイズ拠点病院と受け入れた非エイズ拠点病院のSWによる合同発表を2症例行った。このようにHIV陽性当事者による問題提起を行い、患者対応未経験の参加者も状況や課題が理解できるような内容とした。参加者を3つのグループに分け、「自院でHIV疾患患者を受け入れる際の課題と対策」、「地域でHIV陽性者が安心して暮らすために必要な支援」を討議した後に、全体発表した。

2. エイズ関連の教育資料

2-1. 介護福祉施設向けのエイズ教育資料（動画）作成【図5】

患者の高齢化に伴い、介護福祉施設で支援を受ける患者も増加しているが、受け入れ側である施設の拒否感は続いている。その理由として、依然としてHIV感染症は、「感染力が強い」「致命的な疾患」と



図5 e-learning 動画

いった、40年前の知識がアップデートされていないことが想像される。

それらを払拭するための教育動画を作成した。研修会の前に上映しており、本年度中には、ホームページ掲載予定である。

なお本研究費で作成した小冊子・パンフレットは、今年度は「知らないままでいいの? ケツユウビョウのあれこれ～施設での不安をこれで解消!～」をVer.6に改定した。

3. その他医療・福祉体制の構築に関する取り組み

3-1. 中四国エイズセンターホームページ (<http://www.aids-chushi.or.jp>) による情報発信

本院主催の会議や研修会の様子を掲載した。また前述の小冊子の案内や、中国四国地方で行われるエイズ・HIVに関する研修会・イベントの案内、血友病薬害被害者対象検診外来のお知らせ等を掲載している。(2025年1年間の閲覧数71,247回)。また、外国人HIV陽性者対応として、従来の英語版のみならず、インドネシア語、ポルトガル語、ベトナム語、タイ語版を作成し、それぞれの母国語の患者に対する疾患や医療制度の説明に使用している。

3-2. 薬害被害者検診事業

2018年度より「血友病薬害被害者対象検査入院」(検査入院)、2021年度より「血友病薬害被害者検診外来」(検診外来)を行っているが、共にその費用は保険請求せず、全て研究費で工面することとしている。2025年度は検査入院が1人、外来が2人であった。内容は、血友病に関連する関節や身体機能に関する項目や腫瘍マーカーなどの血液検査で、それ以外の画像検査の項目については受検者の希望とした。3人とも再受検者であり、あらたに癌は発見されなかった。

D. 考察

考察は以下の通り研修会別に述べる。

医師向け研修会：

近年の参加者は、研修医または卒後10年以内としている。各ブロックにおいても若手医師の育成が課題となっているが、その理由を筆者なりに考察すると、①外来での治療が中心であり、病棟中心の医学生・研修医教育が現状では、患者を担当する機会がない ②疾患背景や医療体制が特殊で理解するのが難しい ③臨床上問題となることが、医学面ではなくほとんどが心理・社会面のため興味を持ちづらい などではないだろうか。以前のような、医療者への感染に対する恐怖、セクシャリティに対する嫌悪感は、若い医療者にはほとんどなくなっているものの、自分の上司や他職種(看護師など)が持つ古い知識や偏見が、彼らがHIV診療を始める上での阻害因子となっている。

これらの問題を解決するためには、歯科医師向け研修会のように、病院の科長・部長レベルに対する教育や、開業医・医師会などに対する働き掛けも必須であろう。

歯科医師向け研修会：

中国・四国地方HIV陽性者の歯科診療体制構築のための研究会議においては、昨年までは香川県のみHIV歯科診療ネットワークが構築されていなかったが、今年ようやく動きがあり構築される予定となった。しかし、構築された県においても、ネットワーク参加歯科医師の地域的な偏在がある。今後はその偏在の解消についても考えて行かなければならない。また一般開業歯科医向け研修会は、歯科医療従事者のHIV感染症への理解を促すことがHIV診療拒否問題を解決するうえで重要な役割を果たすことが確認できた。

看護師向け研修会：

初心者向け研修会の各講義のアンケートから、理解度および満足度において全員の受講者が、とてもあてはまる、または、あてはまるに回答しており、講義内容は基礎知識を習得でき、わかりやすく満足度の高い講義内容であったことが伺えた。

講義の中には昨年と同様に血友病薬害被害者の講演や、当事者の体験を聞き研修受講者からの質問や感想等を自由に話す「座談会」を設けた。研修受講者の感想には「当事者の生の声は心に刺さるものがあり大変貴重な経験となった」とあり当事者の体験や思いをきくことは、患者の理解に役立ち、また自己の感情や価値観に気づくことにつながると考えるため今後も継続していく。「様々な実体験を基にした症例の紹介があるととても心に響く研修でした」や「看護師として現場で実践できる内容が多く明日からまた頑張ろうと思いました」の研修受講者からの感想や自由記載でも「実際の患者のかかわりを学べた」が多く、経験豊富なエキスパート看護師からの実際の事例を踏まえた講義や看護面談のロールプレイにより基礎知識だけでなく実践的な関わり方まで学べる研修となったと推測できる。研修受講生からの感想からは、今後患者との関わりに積極的になり、差別・偏見のない医療体制作りに向けた行動意欲も高まったのではないかとと思われる。全体的に講義、演習、当事者の講演で内容のバランスが良く、基礎知識から実践的な関わり方に加え、多職種連携、性の多様性について学ぶことができ満足度の高い研修といえる。

事例検討会については、今年度は講義と事例検討を組み合わせた取り組みを実施した。講義および事例検討は満足度が高く、講義を希望する意見も多かった。講義内容と事例検討が関連しており、学びが深まったとの感想が多い。次年度も同様の形式を継続するか検討する必要がある。

会議時間については約8割が適切と回答し、次年度も午前には会議、午後に講義・事例検討を予定する。一方で、長いと感じる参加者が約2割で、時間配分の工夫が必要である。また、9割以上がWEB参加を希望しており、中四国ブロックは広域であるため、多くの看護師が参加できるよう次年度もWEB開催とする。

昨年度、「中国・四国ブロックエイズ治療ブロック/中核拠点病院等看護担当者会議運営マニュアル（WEB開催）」を新たに作成した。その中に、中核拠点病院が輪番制で主担当と副担当を務める旨と、

今後の予定担当者案を盛り込んだ。昨年度までは副担当を手上げ制としていたため、決定までに時間を要する状況であった。しかし、今年度は予定担当者案に沿って運営することを事前に伝えたため、副担当施設は問題なく決定できた。今後もこの予定担当者案に基づき運営を行っていくこととする。

薬剤師向け研修会：

本研修会は、講義による知識の整理、症例検討による臨床的思考力の深化、ロールプレイによる実践的スキルの習得を段階的に組み合わせた構成となっており、HIV診療に携わる薬剤師の総合的な能力向上に大きく寄与する内容であった。

また、現地開催により参加者同士が直接交流することで、中国四国ブロック内におけるHIV診療に関わる薬剤師間のネットワークが一層強化され、「顔の見える関係」を構築する貴重な機会となった。さらに、本研修会を通じて、薬剤師のHIVに関する知識や服薬指導技術の標準化・底上げが図られることは、地域間や施設間における診療の質のばらつきを減らし、中国四国ブロック全体におけるHIV診療の均てん化にも大きく寄与すると考えられる。

今後も本研修会を継続的に開催し、薬剤師の専門性と実践力のさらなる向上を図るとともに、HIV感染症診療の質の向上および地域における均てん化、多職種連携の推進につなげていきたい。

心理職向け研修会：

第1回目の専門カウンセラー研修会は、薬剤師と合同開催であった。そのため他職種（主に薬剤師）の意見も反映され、より実りのある研修を行うことができた。全体的に「基礎的な知識から最新の情報まで学ぶことができた」「他職種の視点や考え方を知る良い機会となった」などの満足度の高い意見が多くみられた。さらに本研修会が知識・視点の共有のみならず、心理職同士の連携づくりの場としても機能していたことがうかがえた。

全職種対象の研修会（包括カウンセリング研修会）の対象者は、ブロック及び中核拠点病院の全職種であった。研修会への参加機関は、安定的な体制が構築され、継続的な取り組みを通じてHIV診療チームとしての基盤が形成されている。今後はこうした基盤を有する機関を中心としつつ、継続的な人材育成の観点から、経験が比較的少ない機関も参加しやすい運営上の工夫について、検討していく必要がある。

担当者の退職や転職、あるいは多忙に伴うスケジュール調整難などの理由により、以前と同じよう

にブロック・中核拠点病院の全職種が揃っての参加は困難になってきている。しかし、全職種が揃ってなくても困難事例を抱えている病院、あるいはこれから HIV 診療チームを構築・再構築する病院なども存在するため、そういった病院の参加者にも満足のいく内容に変更していく必要がある。

福祉職（MSW）向け研修会：

HIV 感染症患者の高齢化により、長期療養支援をスムーズに行える体制の構築が課題となっている。行われた会議で挙げられた課題は①【高齢化】②【身寄りが無い】③【家族等に病名未告知】④【外国籍患者の増加】⑤【地域資源の利用調整に難渋】であった。

こういった問題に対処するためには、我々が行っている職種別研修の内容では限界があると思われる。多職種の研修会は、包括的カウンセリング研修会であるが、その対象は、チーム医療を行っている中核またはエイズ拠点病院従事者であり、地域の非専門医療機関や福祉関係者ではない。また彼らにこの会の参加を促したとしても、専門的過ぎて二の足を踏むであろう。もっと、そういった地域を支える非専門の医療・介護従事者が参加する研修会が必要と考えた。その一つの試みとして、地域医療を支えている看護師、ワーカーの2職種が合同で問題を検討する「地域連携に携わるソーシャルワーカーと看護師を対象にした HIV/AIDS 実践報告会・検討会」を立ち上げた。県の担当者にも参加いただき、非常に中身の濃いディスカッションができたものと思われる。この研修会については、次年度も継続して行う予定である。

その他の取り組みについて：

ホームページの閲覧数は、昨年に比べて約20%減少した。その理由は魅力的な新規コンテンツがなかった、あるいはエイズ・HIV 感染症に関する特別なニュースがなかったことが考えられたが、多言語対応にしたことで、英語以外の母国語の患者の対応にも役立つことが分かった。広島、特に大学には中国、韓国、アフリカ諸国からの留学生も多く、当然彼らのなかにも HIV 陽性者がいる。さらに、フランス語や北京語、ハングル語版などを作成していく必要がある。

教育資料として、今年度は「HIV を持つ人のケアをするスタッフのためのガイドブック」を新規作成予定としていたが、時間と予算の関係で断念した。しかし、e-learning 動画作成後、まだ広く配布、周知しておらず今年はそれに専念した。次年度には、

その効果の検証を行う予定である。

E. 結論

ブロック内のエイズ拠点病院に対する職種別研修は、内容や対象者を再考しながら常にアップデートしていく必要がある。また研修会の対象者や内容も、その時々事情により柔軟に変えていくべきである。具体的には療養介護・福祉施設の従事者に対しては、平易でわかりやすい表現、あるいは興味をもちやすい内容やツールを用いる必要があると思われる。そうすることで、HIV 感染症を身近に感じることができ、安定している患者の受け入れができるようになると推察する。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 発表論文

- 1) 藤井 健司, 大東 敏和, 板村 まりの, 石井 聡一郎, 山崎 尚也, 藤井 輝久, 松尾 裕彰. ドルテグラビルとカルバマゼピンの薬物相互作用に対して抗てんかん発作薬を変更した HIV 感染症の1例. 日病薬誌. 2025, 61, 511-515.
- 2) Amano K, Fujii T, Sawada A, Nagao A, Nagae C, Nojima M, Suzuki N, Kawano M, Shimura T, Sugao Y, Hattori N, Nogami K. TSUBASA Study : Evaluating Association of Physical Activity and Bleeding Events in People With Haemophilia A Without Factor VIII Inhibitors Receiving Emicizumab. Haemophilia 2025, 31, 14-23.
- 3) Teruhisa Fujii, Keiji Nogami, Akihiro Sawada, Azusa Nagao, Chiai Nagae, Masanori Nojima, Nobuaki Suzuki, Mika Kawano, Tomomi Shimura, Yoshimasa Sugao, Kagehiro Amano. TSUBASA study : evaluation of the quality and content of daily life of people with hemophilia A without factor VIII inhibitors on prophylactic treatment with emicizumab. Res Pract Thromb Haemost 2025, 9. e-102971.
- 4) 長尾梓、近澤悠志、兼松毅、山崎尚也、野島正寛、寛井透雄、天野景裕、澤田暁宏、鈴木伸明、竹谷英之、日笠聡、藤井輝久、松下正. 成人血友病患者における心血管疾患コホート研究 ADVANCE Japan ―合併症及び治療薬に関す

る中間サブ解析. 臨床血液. 2025, 66, 1438-1448.

2. 学会発表

- 1) 菊地 正、西澤雅子、椎野禎一郎、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、渦永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、佐野貴子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、今橋真弓、蜂谷敦子、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、阪野文哉、川畑拓也、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、松下 修三、仲村 秀太、小島 潮子、LuckyRuntuwene、吉村和久、杉浦 互：2024年の国内新規診断未治療HIV感染者・AIDS患者における薬剤耐性HIV-1の動向. 第39回日本エイズ学会学術集会・総会. 2025年12月5日～7日. 熊本
- 2) 藤井輝久、中十奈苗、山崎尚也、浦島藍子、重信英子、後藤志保、坂本涼子、杉本悠希恵、黄寛美、喜花伸子、片平尚貴、児玉博臣、金本大地、田阪陵雅、山内映里. アンケート調査より垣間見るHIV陽性者と介護福祉施設の疾患意識のギャップ. 第39回日本エイズ学会学術集会・総会. 2025年12月5日～7日. 熊本
- 3) 福田あかり、古賀道子、田中貴大、保坂隆、石坂彩、野島正寛、柿沼章子、後藤智己、藤谷順子、伊藤俊弘、今橋真弓、江口晋、遠藤知之、木内英、阪森亮太郎、高橋俊二、照屋勝治、丹生健一、橋本則久、花井十伍、藤井輝久、南留美、茂呂寛、渡邊大、渡邊珠代、四柳宏. 薬害HIV被害者に対するがん検診受検希望についてのアンケート調査. 第39回日本エイズ学会学術集会・総会. 2025年12月5日～7日. 熊本
- 4) 石井総一郎、藤井健司、山崎尚也、藤井輝久、松尾裕影. 当院におけるカボテグラビル+リルピビリン投与24ヶ月の有効性及び腎機能・血清脂質の変化に関する調査. 第39回日本エイズ学会学術集会・総会. 2025年12月5日～7日. 熊本
- 5) 後藤志保、喜花伸子、重信英子、山崎尚也、坂本涼子、獅子田由美、福島琴美、杉本悠希恵、黄寛美、浦島藍子、藤井輝久. 再診患者に対する電子問診票導入後の評価—患者アンケートの結果から—. 第39回日本エイズ学会学術集会・総会. 2025年12月5日～7日. 熊本
- 6) 新谷智章、岡田美穂、川越麻衣子、岩田倫幸、山崎尚也、藤井輝久、柴秀樹. 血友病患者の口腔環境・口腔機能と *Streptococcus mutans* 検出との関連性. 第39回日本エイズ学会学術集会・総会. 2025年12月5日～7日. 熊本
- 7) 黄寛美、藤井輝久、喜花伸子、杉本悠希恵. HIV陽性者の中年期に注目した気分プロフィール検査の傾向. 第39回日本エイズ学会学術集会・総会. 2025年12月5日～7日. 熊本
- 8) 坂本涼子、藤井輝久、後藤志保、山崎尚也、喜花伸子、重信英子、杉本悠希恵、佐々邊やよい. 「AIDS UPDATE」に対する看護師の認知度に関する調査. 第39回日本エイズ学会学術集会・総会. 2025年12月5日～7日. 熊本
- 9) 藤井輝久、山崎尚也、中十奈苗、土石川佳世、長尾梓、遠藤知之、武山雅博、鈴木伸明、南留美、日笠聡、上村悠、近澤悠志、大野久美子、木内英. 血友病患者の骨密度低下に関する研究—多施設共同観察研究のデータより—. 第47回日本血栓止血学会学術集会. 2025年6月28～30日. 名古屋

H. 知的財産権の出願・登録状況

特になし